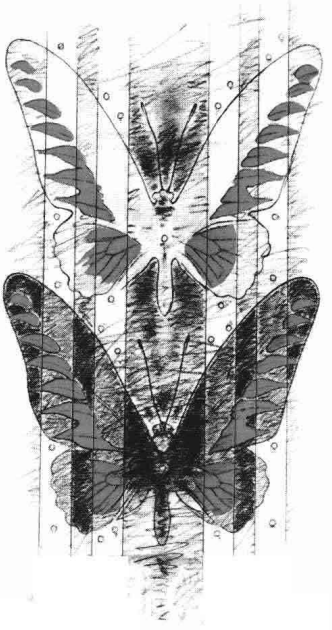
きらきらと闇に堕ちて

山崎洋子

きらきらと闇に堕ちて



山崎洋子

中央公論社

きらきらと闇に堕ちて

定価一〇〇〇円

昭和六十三年六月十日　初版印刷
昭和六十三年六月二十日　初版発行

著　者　山崎洋子
発行者　嶋中鵬二
印刷所　三晃印刷
製本所　大口製本
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京二-三四

©1988 Printed in Japan

ISBN4-12-001697-8

目次

第一章　熱い孤独　9
第二章　魔　蝶　33
第三章　罪の島　85
第四章　楽園の悪魔　147
第五章　うしろ姿の愛　207
あとがき　249

各章のはじめの詩は、ヘルマン・ヘッセの「蝶」からの引用で、岡田朝雄氏の訳を使わせていただきました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きらきらと闇に墮ちて

シンガポール市街図

パン アイランド エクスプレスウエイ
晩晴園
(孫文記念館)
千灯寺院
植物園
マウントエミリー公園
オーチャード通り
回教寺院
リバーバレー通り
戦没者慰霊公園(血債の塔)
シンガポール河
フォード
カニング公園
マーライオン公園
パールズヒルシティ公園
ヒンズー寺院
中国寺院
マラヤ鉄道
シンガポール駅
マウント フェーバー
ケーブルカー駅
イースト コースト パークウエイ
シンガポール海峡
ブラニ島
世界昆虫館
戦争資料館
セントーサ島
0
2km

*

女は暖かそうな杏色の肌をしていた。長い黒髪が、片方だけむき出しにした肩に流れていた。ほっそりとした肉体に絹のサリーをまとっていたが、それは男の好みだった。

おまえの肌にはオリーブ色が良く似合う、と彼が言うので、女は今夜もその色を身につけていた。

鈍い明かりのともる部屋へ、女はドアをきしませながら入った。古ぼけた、だだっぴろい部屋だった。

家具といえばダブルベッドと机、それに小さな冷蔵庫。それだけしかない。白い壁にはぽつんと小さな矢印。それがメッカの方向を差しているということを、女はこのホテルに着いた夜、彼から教わった。

男はベッドにもぐり込んでいた。シーツを引きかぶり、声を上げて泣いていた。

女はコーラルピンクの小さな蘭を抱えていた。近くの山から摘んできたものだ。それを男の顔のそばにそっと置いた。男はいきなり起き上がり、女の腕を乱暴に掴んだ。

「やっぱりあいつは俺を殺しにくる。もう俺に生きててもらいたくないんだ。俺が生きてちゃ困るんだよ！」

日本語だったが、女は意味を理解した。何度も同じ言葉を、彼から聞かされていたからだ。それ

が嘘や幻覚ではないことも、今ではよくわかっていた。
男は怖がっているのではない。悲しんでいるのだった。そして自ら死の手を待っている。
なぜ逃げないのか、と女は何度も尋ねた。そのたびに、男の顔には奇妙な微笑が浮かんだ。涙のほうがまだましだと思えるような、荒涼たる微笑だった。
「あれを隠したな」
男がまた日本語で言った。女といる時、男はたいてい英語で話してくれる。女の母国語であるマレー語を、片言で喋ってみせることもある。だがこんな時は、日本語になってしまう。
「どこへやったんだよ！　どこへ隠した！」
男が起き上がった。下着一枚だった。女の肩を激しく揺さぶり、
「出せよ！　なぜおまえまで俺をいじめるんだ。頼むから助けてくれよ！」
サリーが女の肩からむしり取られた。蘭の花束が胸に投げ付けられ、花弁が寄せ木の床に散った。
女は低い叫び声を上げ、胸を押さえてうずくまった。男はその髪をつかんで引き起こし、もう片方の腕を女の首に廻した。
「出さなきゃおまえを殺すぞ。そんなことを俺にさせるな、な、させるなよな！」
背中から、男の体の震えが伝わってくる。首に廻された腕に力が加わり、女は出口を失った血が頭の中で逆流するのを感じた。苦痛に体をねじりながら女はバスルームを指差した。男は彼女を抱えたままそこへ突進した。
「どこだ」
彼は女をタイルの床に放り出し、ところどころ染みのついた白い空間を血走った眼で見回した。女は喉をさすりながら立ち上がり、便器の水槽タンクから黒いビニール袋を取り出した。

男はそれをひったくり、部屋へ駆け戻っていった。スプーンや注射器の触れ合うかすかな音を、女はバスルームの壁にもたれたままで聞いた。

捨ててしまえばよかったのかもしれない。だが同じことだ。彼はどんな手段を使ってでも、あれを手に入れるだろう。この国では簡単に手に入る。なのに警察に捕まれば死刑にもなりかねない。外国人だろうと容赦はしない。いや外国人だからこそ、旅行者へのみせしめに極刑を実行するという噂もある。女は彼をそんな目にあわせたくなかった。

涙を拭いながら女は部屋に戻った。男は虚脱状態でベッドに横たわっていた。ヘロインの中には眠りの神モルフェウスが住んでいる、と男から教わったことがある。モルヒネという言葉はそこからきたんだよ、と。

いま彼はモルフェウスの腕に抱かれ、つかのまの安らぎをむさぼっている。死の使いがこの瞬間にも近づきつつあることを、ようやく忘れて。

女はベッドに腰を掛けた。すすり泣きながら男に頬ずりした。机の脇にあるクッキーの缶に眼がいった。それが預り物であることを女は知っていた。

女は缶を取り、その蓋を開けた。三角紙に包まれた蝶がぎっしりと詰まっていた。女は憎しみをこめて蝶を床にぶちまけた。それから三角紙を一枚一枚開いた。

取り出した蝶の翅をむしり、ベッドの上に散らしていった。色鮮やかな熱帯の蝶だった。

女は夢中で手を動かし続け、男の体を、白いシーツを、花びらのような翅で覆っていった。

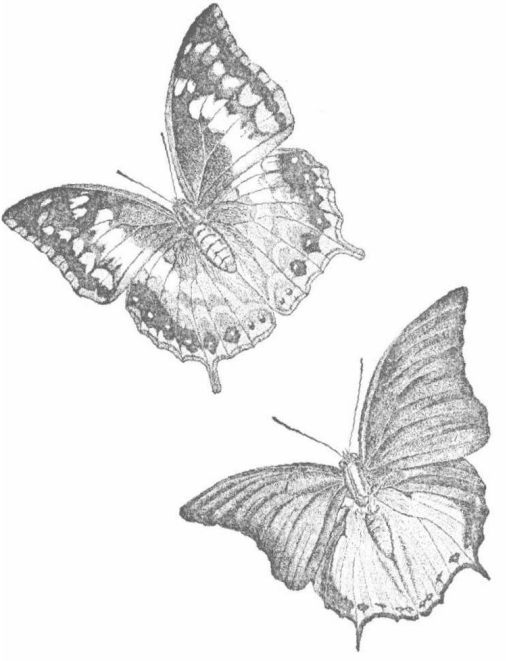
男が眼を覚ましたのは、真夜中を少し過ぎた頃だった。彼は首を伸ばし、散りばめられた蝶の翅を不思議そうに眺めた。それから、素裸で傍らに横たわる女と眼を合わせた。

女の行為を男は咎めなかった。かすかにバラの香油が匂う杏色の肌を、蝶の翅ごと抱きしめた。

「ハ・ヤ・ト……」
女は男の名を呼び、もどかしい思いで唇を合わせていった。彼はそれに応えた。髪を、首筋を、胸を愛撫されながら女は涙を溢れさせた。
「泣くな」
男が囁いた。
「もう最後までおまえのものだ」
女は頷こうとした。が、動かしかけた首が途中で止まった。ドアにノックの音が聞こえた。
二人は眼を見交し、互いを抱く手に力を込めた。ドアはノックされ続けた。最初は遠慮勝ちに、途中からは断固とした意志を持って。
「おまえは行け」
男が囁いた。ベランダを指差し、女の体をベッドから押し出した。
女は訴えるように男を見たが、男の眼はドアだけを見つめていた。その顔には、もはやどんな感情も残っていなかった。
女はサリーで胸を覆い、男を凝視しながら後ずさった。ベランダの戸を開け、足を外に踏み出した。
強い風が室内に吹き込み、無数の蝶の翅が吹き上げられた。電灯の光を反射した翅は、極彩色にきらきらと輝き、いっとき生あるもののごとく輪舞した。
女がベランダの戸を閉じると同時に、男はドアを開けた。女がガラス越しに見たのは、死神を迎えようとしている男の後姿だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　熱い孤独



Charaxes mars（♂，♀）
マルスフタオ（上メス、下オス）

かつてあんなに暖かく真夏のように輝やかしかったこの地上で
なんと私は凍えることを学ばねばならなかったことだろう！
なんとたくさんの衝動に駆られてただ死んで塵と化すために
貪欲な生を花咲かせたことだったろう！

1

バンコクの街にはいくつもの市場がある。タイへきたばかりの頃、実生はその猛々しいほどのエネルギーに魅せられた。新鮮で安価な魚介類、熱い陽を吸って大ぶりに成長した野菜類、正体不明の乾物類。

それらが足の踏み場もないほど並べられた一角を、土地の人々とぶつかり合いながら歩いた。持参のビニール袋からはみ出すほど買物をし、和風や中華風に工夫して料理した。

楽しかった。一か月はそれで保った。自分は主婦向きの人間かもしれないと錯覚したほどだった。次の一か月はタイ料理を習いに行き、ついでにタイ語もマスターしようと努めた。

だが半年たった今、料理も語学も、この国に対する興味さえも、実生の中には残っていない。あるのは倦怠と焦燥だけだ。

昨日も今日も無目的に家を出てきた。暑いのでそうは歩きまわれない。タクシーをつかまえ、ヤワラ通りと告げた。

ヤワラにはチャイナタウンがある。その喧騒の中に身をおけば、とりあえず退屈からはまぬがれるような気がした。

チャイナタウンの市場に入った。半年前、初めて来た時同様、ここは活気に溢れていた。実生はライチーを一房買っただけで、それを引きずるようにしてふらふらと歩いていた。

誰かが実生の腕にさわった。振り向くと小さな女の子だった。ポンマライと呼ばれるお供え用の花輪を持ち、哀願するような眼で見上げている。白いワンピースに小さなショルダーバッグを提げた実生は、いかにも外国人に見えたのだろう。

実生は首を横に振った。するとその瞬間から、市場全体の雰囲気が険悪になった。みんなが出ていけがしの眼で睨んでいる。むろんそれは実生の被害者意識なのだが、とにかく居心地は悪くなった。

何かの骨や野菜屑につまずきながら、実生は大通りへ走り出た。漢方薬店や金行（金細工物店）のけばけばしい看板の立ち並ぶ通りを、タクシーを捜しながら歩いた。

乞食が二人、枯れ枝のような手を差し出しながらついてくる。陽は容赦なく照りつけ、蒸された空気は車の排気ガスで熱くよどんでいた。

露店のカセットテープ売りが、街の騒音に負けじと大音響で中国歌謡を流している。香菜と油と漢方薬の入り交じった臭いに、実生は吐きそうになった。通り掛かったサムロを止め、

「タウライ、スクムビット？（スクムビット通りまでいくらか）」

と尋ねた。七十バーツだと、運転手は答えた。タイではタクシーもこのダイハツ・ミゼットを改造したサムロもメーターなど付けてはいない。料金は乗る前に交渉するシステムだ。

実生は首を横に振り、三十バーツ、と指を三本立ててみせた。運転手は薄笑いを浮かべ、行ってしまう素振りを見せた。タクシーがなかなか捕まらないことを知っていて、足もとをみているのだ。

幌の付いた座席に、実生は仕方なく乗り込んだ。一刻も早くクーラーのきいた家へ帰りたい。

スクムビット通りはバンコクの郊外にあった。静かな住宅が並んでいると思うと、高層ホテルやソープランドもあるという不思議な一角だ。

半年前、実生と夫の隼人はここに家を一軒借りた。ベッドルームが三つと広いリビングルームがあり、タイ人のメイドがついている。

黄金色のゴールデンシャワーや赤いハイビスカスの咲き乱れる庭から、実生は家の中に入った。良く片付いた冷たい部屋を求めて帰ったのに、期待は見事に裏切られた。

家中がどこか燃えているのかと思うほど暑い。クーラーを入れようとして、コンセントが引きちぎられていることに気付いた。おまけにあちこちの引き出しは開けっ放し、台所はパーティの後のように散らかっている。

今朝メイドと大喧嘩したことを思い出した。ここへ来た当初のメイドが結婚で辞め、別の若いメイドが来たのはまだ一か月ほど前のことだった。

翌日から現金や実生の洋服が減りはじめ、じきに彼女の仕業であることがわかった。

また違うメイドを探すのが面倒で、実生は見てみぬふりをしていた。が、彼女はそれで調子にのり、実生の外出中、実生のベッドへ自分のボーイフレンドを引っ張りこんだ。

そのままシーツも取り替えなかったことを、今朝になって隣家の運転手から知らされた。

人の汗や体液の染み込んだベッドに寝かされたかと思うと、鳥肌が立った。実生が責めると、メイドは平然と言い返した。奥さんも寂しかったら誰か紹介してあげるよ。

実生は日本語と英語のちゃんぽんでメイドを怒鳴った。メイドはタイ語と英語でののしり返した。その結果がこれだ。ドレスやきれいな下着や現金など、取るだけの物を取り、クーラーまで使えなくして彼女は出ていった。

有り難いことにウイスキーを残していってくれた。実生はボトルとグラスを抱え、リビングルームの籐椅子に沈み込んだ。汗をしたたらせながら、タイ産のメコン・ウイスキーを喉に流し込んだ。

甘い香りがした。タイの辛い料理に良く合う。もっとも実生は、このところ肴なしのストレートばかりだ。アル中のくせに、とメイドにののしられても仕方のない飲みかたをしている。

夫に捨てられたくせに、とも彼女は言った。哀しいことにそれも事実だ。隼人はもう二か月近くもここへ戻ってこない。東南アジアのルポを書くと言っていたが、どこで何をしているのだろう。

元々が壊れかかった夫婦仲を、何とかしようというのでやってきたタイだった。しかし隼人がここにいたのは最初のひと月だけ。あとはタイのどこかにいるのか、よその国へ行ってしまったのか、それすらもわからない。

だが実生は彼の行方などどうでもよかった。飲まずにいられないのは、自分の行末を考える時だ。この夏で二十八になった。若いといえば若い年齢なのかもしれないが、すでに二度も、これまでの人生をゼロにするようなことをやった。

そして現在、愛もなく賭けるべき何物をも持たず、熱い異国で孤独に震えている。

ボトル七分目のメコンが空いた頃、実生は電話のベルを聞いた。受話器を取ったという記憶はないのだが、人の声が聞こえてきた。

女の声だった。マレーシア……と言ったような気がする。次になぜか日本語が聞こえてきた。それもあろうことか、昔別れた男の声だ。

あなたの声なんか聞きたくない。

室内がゆっくりと回転していくのを感じながら、実生は呟いていた。口に出して言ったのか、心で思っただけなのか、それはわからない。何もかも幻覚じみていた。

誰だかがいなくなった、とその声は言ったようだ。隼人が知っているから会いたいのだ、と。

実生は笑った。ここには誰もいないのよ、隼人もメイドもいないのよ、わたしは一人でパーティ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com